

IT 社会と大学博物館の教育的価値

原田 佳子

A Study of IT Society and the Educational Value of a University Museum

Yoshiko HARADA

Abstract

At the end of 20th century, the Information Technology Revolution has made an attack on Japanese society. The rapid development of information technology has given Japanese people efficiency and convenience, and also some risks. At first I would like to look at the risks of an IT society, which is a matter of human nature.

In this paper, I will maintain that museum education is very useful for people to regain their human nature. Then I will argue about the special quality of Museum Education — the people, objects and the place. I put on stress how the University Museum is valuable for University Education.

は じ め に

ある論説や学説が社会の動きを変え、その動向をリードする事は、文明社会でしばしば見られる現象である。その変革の歩みが歴史をつくり、人びとの思考、生活、制度などを変えて来たと言ってもよい。

2004年の『大学時報』7月号の特集「教養教育の充実と発展」は、これからの大学教育に或る指針を与え、さらに社会の動向を変える一つの事例と考える。その中の絹川正吉氏（大学教育学会前会長・国際基督教大学前学長）の論考「これからの教養教育」は、まさにこれからの大学の教育に強力な影響を与えるものではなかろうか。一言で言えば、それは大学における教養教育の重要性を説き、「リベラル・アーツ教育」の復権を説くものである。その内容については後で触れ、本論を進めるうえで参照したい。

しかし、本論文の主目的は、21世紀 IT 社会における博物館教育の重要性を論じ、大学博物館の必要性和その教育的価値を明らかにすることである。

人間は教育されることによって成長し、一人前になる生きものである。今日、家庭教育、学校教育と並び、人間教育の一翼を担い期待されているのが生涯学習であり、それを担う博物館の教育である。1970年代から博物館は、余暇の増大、平均寿命の延長、経済的余裕などの理由から、増加の一途を辿って来た。21世紀に入り、「生涯学習施設」としての博物館の教育は、重要性を増している。それは一体何故か。その理由の一つに深底において、20世紀末の急激な社会のIT化があると考え。そこでまずIT社会の中で、どのような問題が起こっているかを明らかにする。次いで博物館の教育の特質を考察し、大学の教育と大学博物館の存在意義について論じたい。大学の教育と研究を推進するうえで、大学博物館を持つ意義は非常に大きいと考える。

I IT社会の問題

人の一生と同様、人類の歴史約250万年の間には、多くの危機があったと思われる。文明の進歩とともに危機や危険が減少することはない。むしろ益々増大している。人類のために役立ち、社会を豊かにするはずの科学の産物、例えば、原子力の発明や自動車の発達など多くのものが、人類にむしろ新たな危機をもたらしている。自然や人間生活、さらには人間性そのものが危機に晒される時、我々は全力をあげて対処しなければならない。現代社会の急激なIT化は、さまざまな問題を起こしているが、その問題の根源をなすのは人間である。

1. IT社会の到来

20世紀末、わが国を襲ったIT（Information Technology 情報技術）革命は、人々を否応なく情報化社会へ巻き込んだ。コンピュータは21世紀の幕開けとともに、またたく間に家庭や小・中学校まで普及した。急速なIT社会の到来は、「考える葦」であるはずの人間に、あふれる情報を調整し思考する暇さえ与えなかった。IT革命がIT社会にもたらしたのは、光ばかりではなかった。IT社会の「光」、即ち、効率と利便性ばかりが強調され、「影」、即ち、危険や疑念は余り問題にされて来なかったのではなかろうか。しかし、その「影」の部分を深く考え、対処するならば、現代社会に起こる問題を少しでも回避することができると思う。また、博物館¹⁾の教育の重要性とその意義が、より明確になって来ると思う。

1) 本稿でいう博物館は、博物館、美術館、科学館、動・植物園など総てを含む。

2. IT 社会の影

科学技術の進歩とともに IT 社会の「光」と「影」は進行する。多くの場合、不安や問題点は先送りされ、影は見過ごされがちである。しかし、否応なしに進む IT 社会に生きる人類の未来を明るくするためには、影もまた明瞭に把握されなければならない。

IT の専門家は IT の「影」、即ち、危険な側面としてプライバシーの侵害や情報の漏洩、不正・不法情報の害、ネット災害やウィルスの問題等々を挙げる。しかし、筆者はこうした目に見える危険や害以上に人間の内面にひそむ危機に目を向けたい。最も注視しなければならないのは、IT 化の中で動揺する人間の心の問題である。つまり IT 化の中で生まれる異常な精神など人間性の根幹に関わる問題である。

3. IT の進行と人間の心

IT 化と人間の心の問題を一言で言うことは難しい。しかし敢えて言うならば、メディアの発達に伴い、それを使いこなす人間の成長の問題と言えよう。インターネットやパソコンの世界は、架空・仮想の世界である。その世界に長い間浸ることは、人間の思考や感覚にどのような影響を与えるのか。ネットの時間や空間を現実の時間や空間と間違える・錯覚する害は、人間に何をもたらすのか。言うまでもなくメディアの発達は、それを使いこなす人間の責任と倫理を重くする。自然の速度の中に生息する人間が、メディアの進行に追いつかず、対処し難くなっているところに問題が生じると考える。かつて、映画「モダン・タイムス」で機械文明に翻弄される人間の姿を描いたチャプリンは、IT 文明に翻弄される現代の人びとの姿を、どのように描くであろうか。

4. 仮想現実と現実

IT 社会におけるバーチャル・リアリティ（Virtual reality 仮想現実）は、五感を持った自然の生きものである人間に、ある種の偏向を強いる。視覚偏重の傾向である。視覚教育偏重で育った人間は、バーチャル・リアリティの虚像を現実と取り違え、フェティシズム（Fetishism 拝物愛）に陥ると言われる。映像やネット上の仮想現実が再生が可能である。テレビやコンピュータ、ビデオで動物や人を殺害するゲームに浸ると、現実の生きものの生命も再生可能と錯覚するようになり、遂には破壊攻撃が止められず、「生命尊厳」の意識が失われるという。

20世紀末から21世紀初めにかけて、ここ数年間に起こった若者や少年少女の衝撃的な殺人事件は、IT 社会の影を色濃く反映している。ビデオに埋まった個室でビデオ漬けになった若者²⁾,

2) 1988～9年に埼玉・東京で4人の幼女誘拐殺人をした若者。

鍵っ子でテレビを友として大きくなった少年³⁾、早くからコンピュータに嵌まりチャット⁴⁾などの技に長けた小学生⁵⁾などの幼児やクラスメートの殺害に見られる生命軽視は、等閑視できない IT 社会が生んだ暗闇であろう。これは外界の影響を受け易い成長期に、テレビやビデオ、携帯電話やインターネット漬けで育った子どもが、本来の人間らしさを失った実証的事例と言えないであろうか。

それではこの IT 社会の問題を改善できるものは何か。人文・科学、宗教など人間の心と精神を問題とする分野での研究と実践が期待される。しかし、筆者は人間形成に欠かせない教育こそ最も有効な方法であると考え。中でもより自由で自発的な生涯学習の場である「博物館の教育」にこそ期待する所が大きい。IT 社会における博物館は、人間の精神が生んだ芸術や文化に親しみ、生身の人間が離れては生存することができない自然や現実に触れ、人間性を取り戻すことができる重要な場であると考え。

II 博物館の教育と大学の教養教育

1. 博物館の教育

(1) 知の根源—博物学から近代博物館の時代へ

近代の博物館は、幾世紀にもわたる博物学の蓄積の上にあることを忘れてはならない。博物学は、西洋でナチュラル・ヒストリー (Natural History) と呼ばれる。動物・植物・鉱物、生物など広く自然物を対象とし、その歴史、種類、構造、成分などを科学的に探究する学問である。近代の博物館が取り扱う博物館資料は、その博物学が研究して来た、また研究しつつある自然界に存在するあらゆる天産物であると言える。自然そのものを研究する学問、知の根源としての博物学から、現代はその研究の成果を教育的配慮の下に展示公開する博物館の時代へと移って来たと言える。

博物学は、「自然物に対する人間本来の好奇心と知識欲に発する」⁶⁾と言われ、その歴史は古い。1世紀ローマ時代の大プリニウス (G. Plinius AD 23-79)⁷⁾と18世紀フランスのビュッフォン (G. L. L. C. Buffon 1707-88)⁸⁾は、ともに『博物誌』を著わした著名な博物学者である。彼らは宇宙から地理、民俗、動物・植物・鉱物など自然に関する幅広い知識を集大成し、博物学

3) 2003年、長崎市で幼児をビルから突き落して殺害した中学生。

4) コンピュータで人間を相手にコミュニケーションするオンライン・ゲーム。

5) 2004年、佐世保市の小学校で同級生をチャットが原因で殺害した小学生。

6) 上野益三著『博物学の時代』八坂書房、1900年、144頁。

7) Gaius Plinius Secundus はローマ帝政初期の政治家・軍人・学者であった。

8) George Louis Leclerc Comte de Buffon は王立植物園長を務めた文人・自然科学者。

の普及と自然物の科学研究の促進に貢献している。

博物館の目的と使命は、その博物学の延長上にあり、博物学が追求して来たものを単なる知識や学問で終わらせず、社会へ還元することであろう。天然自然の実物をはじめ自然の実相を示す形を再現し、直接人びとの好奇心や知識欲に答えるのである。博物館は博物学が研究対象とした自然と自然物を、実物、標本、模写、模型、文献、写真などによって展示公開する。博物館の収集・展示の対象となるのは、動植物などはもちろん、動物の仲間である人間に関わる歴史や人間が造り出した芸術・文化・産業なども含まれる。しかも、教育研究機関としての博物館は、過去のもの（遺物）を取り扱うだけではない。常に現代の視点から過去のことを研究し、さらに現代そのものを研究対象としている。

よく見ると博物館資料は、博物学が対象とした自然のまま、自然そのものとは言えない。歴史、芸術、民俗、産業、自然科学など博物館が扱う資料は、必ず人間が選び、考え、造るなど何らかの形で関与している。つまり博物館資料は、自然という縦軸と人間と言う横軸によって織り出されたものと考えられる。従って博物館は根底において「自然」と深く関わっていると同時に、「人間」が強く関与した施設と言える。

(2) 博物館の原点

ミュージアム（Museum）の起源とされるギリシアのムーゼイオン（Mouseion）は「学芸の女神ムーサイ（ミューズ）の神殿」、即ち、学問芸術を司る女神たちの神殿であった。プトレオマイオス1世によってエジプトに創設されたムーゼイオンは、教育・学術研究の施設であった。ミュージアムのルーツを尋ね、歴史をたどる時、博物館の本来の姿と特質が明らかになってくる。ここで一体博物館は何をする所か、近代の博物館は何を期待されているかを改めて問うてみたい。博物館になくてはならないもの、博物館でしかできないことは何かを明確にすることによって、博物館の教育の独自性が明らかになると考える。

わが国で初めてミュージアムが「博物館」と訳されたのは、明治5年（1872）の『英和対訳辞書』（開拓使発行）においてであると言われる⁹⁾。従って、まず博物館は「学問芸術を司る神殿」、つまり「学問」と「芸術」を担当する所（場）なのである。担当する「学問」すなわちサイエンス（Sciences）は、哲学、史学、文学、社会学、自然科学などの総称である。また「芸術」は人の手による美の創作・表現である。しかし、近代の博物館は学問芸術を専門に取り扱うだけ、つまり博物館資料の収集保管に当るだけではない。エジプトのムーゼイオンと同様、教育・研究施設として、学問芸術をもって教育に当る教育機関であることが求められている。

9) 椎名仙卓著『明治博物館事始め』思文閣出版、1989年、25頁。

従来、社会教育施設と言われていた博物館は、1990年代から、人びとが主体的に学ぶ生涯学習施設と呼ばれるようになった。平均寿命の伸長、余暇の増大、経済的余裕、文化的レベルアップなどから、今後とも生涯学習に対する意欲は増し、博物館の教育に対する期待はますます強まると思われる。

2. 教養教育を支えるもの

それではここで一体、大学の教育の中で重要視されて来た教養教育とは何かを考えてみたい。先に挙げた絹川正吉氏の「これからの教養教育」によれば、これからの日本の大学教育は、専門学校教育ではなく、学士教育課程教育、すなわち、「日本的リベラル・アーツ教育」であると言う。これは大学審議会の答申（1998年）の「二十一世紀の大学像と今後の改革方策について」で示されたものである。このことを受けて氏は、大学教育は「教養教育」にある、と強く主張している。また、現行の大学設置基準第19条は、「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」教養教育を義務化している、と言う。しかし、多様化した時代にあって、氏も述べるように現代の教養教育は、従来の「学術にかかわる教養」の領域を超え、非常に広い範囲に及んでいる。1991年の大学設置基準の大綱化によって「一般教育」の名称が消失し、大学の教養教育は拡散、星雲状態になった¹⁰⁾、と言うのも事実であろう。

しかし、変革の真っ直中でこそ立ち止まって、教養とは何か、を根本から問う必要がある。まず何よりも、「本来、教養とは実利のためのものではないはず¹¹⁾」と言うのは正鵠を得ていると考える。また教養は自ら^か贏ち取るもので、与えられるものではない。それは深く人間性に関わり、思考力、判断力を養うものである。そしてまた、教養はゆっくり醸成されるものである。

さて、大綱化の後、カリキュラムの中には学問大系もなく新たに生まれた科目名が数多く並んでいる。これだけ多くの科目に専門教員を揃えることは難しい。従って、専門を持つ一人の教員が各々幅広い教養教育をいくつも持たねばならない。その結果、教員と学生に何が生じるかについて、追跡調査することは一つの課題である。

また、教養教育と称してコンピュータ関連科目や語学科目ばかりが多くなれば、これもまた問題である。さらにセミナーでレポートの書き方や〇〇方法〇〇技法などが主な授業内容になるとすれば問題である。つまり、基礎力養成と称して技術の基礎力養成にばかり傾くならば、真の教養教育から離れて行くのではなかろうか。即戦力を求める社会、就職先ばかり気にする親、技術・資格を志向する学生の、三者のニーズに答えることは、今時の大学にとって重要課題である。しかし、さまざまなテクノロジーの修得にも増して、自ら考え判断する力を養い、

10) 絹川正吉著「これからの教養教育」『大学時報』7月号、大学基準協会、2004年、30頁。

11) 絹川正吉、34頁。

人生観を構築する教育こそ教養教育である、ということは言うまでもないことであろう。判断力や思考力の基となるのは、自らの立っている「場」、人間としての有り様を見つめ、知ることであろう。一言で言えば、教養教育は己を知り他者を思う人間造りである。その知・情・意とも豊かな人間造りに、博物館の教育は役立つと考える。

3. 博物館教育の特質—ひと・もの・場

さて、それでは博物館の教育と学校教育の違い、博物館と他の生涯学習施設との違いは何であろうか。博物館にしかなく博物館でしか出来ないことは何か。博物館の教育の特質を考え、これらの問いに答えるためには、「ひと・もの・場」がキーポイントになる。言うまでもなく、博物館の教育は「もの・博物館資料」とそれらを保管・展示する「場・建物」、ものを収集・保管・展示し教育普及活動をする「ひと・学芸員」の三者が揃って初めて成り立つのである。

(1) 「ひと」の重要性

中でも博物館の成立からあらゆる活動に至るまで、「ひと」の重要性を最初に挙げたい。何事であれ「まず、ひと有りき」である。博物館資料は「ひと」の目とその価値基準によって選び収集される。ハコ（建物）だけでは博物館と呼ばれない。何の変哲もない土器の破片でも、何百年も前の遺跡から出土したものと分れば、価値あるものとして展示される。何を博物館資料として、どのような意図のもとに展示するか、またどのような教育活動をするかなどは、ひとえに「ひと」にかかっている。いかに価値ある資料があろうとも、またいかに立派な「場」（建物としての博物館）があろうとも、それを生かす「ひと」が居なければ、博物館資料は単なる破片、博物館は単なるハコ（建物）にすぎない。すなわち博物館教育の特質の一つは、「もの」の価値を知り正しく評価し展示して、教育できる「ひと」（学芸員）の存在である。

(2) 「もの」の重要性

次に博物館教育に欠かせない「もの・博物館資料」は、必ず意味と価値を持ったものである。美術品であれば世界に一つしかない貴重なものである。自然のものであれ人工のものであれ、手造りであれ工業製品であれ、博物館資料は本ものでなければならぬと考える。歴史や知識を伝えるための模写・模型、ジオラマなどは、展示手段としての価値はある。しかし博物館資料として収集・保管し展示する「もの」は、そうするにふさわしい唯一無二か、または数少ない貴重な「もの」であると考え。従って博物館における「もの」は、単なるもの、意味のない無価値なものではない。博物館の「もの」は、一つ一つが大切な「もの」であるということが重要である。博物館の教育はその大切な「もの・博物館資料」に依って教育・学習されると

というのが、その大きな特質の一つと考える。

(3) 「場」の重要性

最後に博物館の「場」、すなわち展示空間を中心とする建物もまた博物館教育にとって重要である。学校教育に教室が欠かせないように、博物館教育にとって展示室は欠かせない。価値あるものを価値あるように展示し、見易く分り易く「もの・博物館資料」は生かされなければならない。また「場」は「学問芸術の神殿」にふさわしく、建物の内外とも総てにわたって心地よいことが望まれる。博物館の教育はこの静粛で心地よい「場」で行われるというのが特質の一つと言えよう。

従って博物館の教育は、「展示資料（物）を用いて、ある意図のもとにその価値を提示（presentation）するとともに、展示企画者の考えや主張を表現・説示（interpretation）することにより、広く一般市民に対して感動と理解・発見と探求」¹²⁾を起こさせるものである。

以上のことから、博物館の教育にとって「ひと・もの・場」が、必要不可欠のものであることは改めて認識されるであろう。

Ⅲ 大学博物館の教育的価値

1. 大学博物館の現状

世界最古の大学博物館は、1683年開設の英国オックスフォード大学付属のアシュモリアン博物館である。チャールズ1世の王室付庭師で探検家のトラDESCANT（Tradescant）父子が、大陸で収集した珍しい植物や考古・民俗資料などを、死後、友人のアシュモール（Elias Ashmole, 1617-92）に譲った。アシュモールはこれに自分の収集品を加えて、オックスフォード大学に寄贈、1759年開館の大英博物館より73年も早く、大学博物館は誕生している。海外の主要な大学は、ほとんど大学博物館を持ち、さらに大きな大学では、専門や学部ごとに複数の博物館を持っている。オックスフォード大学には、アシュモリアン博物館のほか3館あり、スウェーデンのルトン大学は、動物学、植物学、地質学、考古学、古典学、美術の7館の付属博物館を持っている。これはほんの一例に過ぎない。アメリカ合衆国の大学博物館で最も古いものは1856年設立のラットガース大学地質博物館と言われ¹³⁾、今日では州立・私立大学ともほとんどの大学が博物館を持っていることはよく知られている。

一方、日本の大学博物館の現状については、『博物館研究 32-5』（1997年5月号）に次のよ

12) 新井重三著「展示と展示法」『博物館学講座』第7巻、雄山閣出版、1981年、12頁。

13) 岡田茂弘著「大学博物館のすすめ」『学芸員 NO 7』学習院大学学芸員資格取得委員会、2001年。

うに報告されている¹⁴⁾。1994年（平成6）6月、文部省（現 文部科学省）は「大学の博物館、標本館、資料館等の実態調査」を実施した。それによれば、全国の国公立大学553校のうち何らかの博物館的施設を有する大学は150校で、全体の約27%である。しかし、独立した施設（建物）を持つのは111校（約20%）に過ぎない。しかもこの中には収蔵庫のみで非公開という所も多く、本来の大学博物館とは言い難いものが含まれている。

目を近隣に向けるならば、広島県内にある大学の博物館施設としては、広島大学医学部の医学資料館と広島市立大学芸術資料館があるのみである。但し広島大学は2006年度に総合博物館設置が決まっており、県内の大学博物館は3館になる。1994年の文部省の実態調査から約10年が経ち、全国的にも大学博物館の数も徐々に増え、内容も整備されて行っていると思われる。何故ならば、5年に一度実施される全国大学博物館学講座協議会の2002年の「実態調査報告書」によれば、博物館の専門職員・学芸員を養成する学芸員課程を持つ大学は、1997年の報告書の244校から287校、即ち5年間に43校と大幅に増えている。それに伴い2000年秋に開館した大谷女子大学博物館、2004年春に開館の明治大学博物館、東京農業大学「食と農」の博物館など、特に学芸員課程を持つ大学で大学博物館設立の気運が高まっている。

2. 大学博物館の役割

わが国の国公立博物館の建設熱は、バブル崩壊後、急速に低下している。その中で長い準備室時代を経て、この2005年10月16日に九州国立博物館が開館した。同じ10月、東京日本橋に三井記念美術館が開館するなど、新しい美術館や博物館も誕生している。しかし、ここ数年来、博物館関係者から「これからは大学博物館の時代だ」という声を聞くようになった。実際、前述のとおり学芸員課程を持つ大学を中心に、博物館実習を行なうために、また大学のピーアールのためにも大学博物館設立が求められている。国公立大学を問わず、高齢化社会に向かい、多様化する人びとの学習ニーズに応え、大学と社会を繋ぐ場として大学博物館の設立やリニューアルの動きがある。

そうした現状の下に、改めて大学博物館の役割とは何かを考え、大学が博物館を持つ意味とメリットを述べてみたい。本学でも数年前から、大学博物館の設立を提案している。その設立の趣旨、目的は次のとおりである。

「大学博物館は知的財産・学術文化財を一元保存管理することによって、大学の教育研究の活性化を図ることを目的とする。」

具体的には、大学博物館の役割は次の三つに要約されよう。第一に博物館資料や美術作品に

14) 岡田茂弘著「ユニバーシティ・ミュージアムの役割と将来構想」『博物館研究 32-5』日本博物館協会、1997年、9頁。

解れることによって、学生の知的好奇心を呼び起こし、勉学や研究意欲を昂め、美的感性を養う。第二に散逸する教員の研究成果や授業で使用した教具・教材など教育の足跡を保存し、今後の教育研究に役立てる。第三に学生や教職員だけでなく、父母同窓生をはじめ地域社会の人びとに学習や鑑賞の機会を提供し、大学と社会を結ぶ拠点となり、開かれた大学の役割を果たす。大学博物館が果たすべきこれら三つの役割は、教養教育とともに今後の大学の教育の質を高めるうえで重要である。地球と人類の将来を考える時、大学は本当に「よい人間」を育てなければならない。18歳人口の減少によって大学が淘汰されるとすれば、生き残るべきは本当に質のよい教育をする大学でなければならない。

自然や人間を深く洞察する諸学の積み重ねの上に、知る喜び、見る喜びを与える博物館の活用を強く説きたいと思う。

3. 大学博物館の教育的価値

そこでまず、大学における学芸員課程の専門科目の教育的意義について述べたい。学生時代に「生涯学習概論」や「博物館概論」などを学び、「博物館実習」をすることは、卒業後も生涯にわたって役立つと考える。学芸員課程の専門教育は、単に資格取得のために役立つだけではない。その主要な教育目標は、社会人になってからも生涯学習する意欲を持ち続け、国内外の博物館に親しみ自然との共生・人びととの交流、美や芸術との出会いを積極的に求める態度を養う人間教育にあると言っても過言ではない。

「生涯学習概論」では、自己啓発の喜びと大切さを学び、「博物館概論」では、博物館の歴史・種類・活動や、博物館資料・経営などについて学ぶ。また「博物館実習」では、貴重な資料に触れて「もの」を大切に扱うことを学び、館務実習では、専門職員・学芸員の多様な仕事を知り、その仕事に対する意欲ややる気を学んで来る。

さて、学芸員課程においては博物館について基本的なことを学んだ後、博物館実習が義務付けられている。この時、大学に博物館があれば、さまざまな博物館資料の調査、収集、保管、展示など、博物館の仕事を常時実習することができる。ことに実際に展覧会の企画実施を実習できることは、大きな教育的効果があると考え。出品資料の調査や展示計画から、実際の展示・撤去作業、解説や広報活動など知的作業のみならず、身体を動かして多くのことを体験し、学習することができる。

しかし、大学博物館の活動は、学芸員課程に学ぶ学生の教育のためだけのものではない。大学博物館の役割で触れたように、キャンパスに集う全学生に開かれており、展示した博物館資料は、全学生の知的好奇心を呼び起こし、感性教育に役立つと考える。

メディアやバーチャルなものに囲まれ、IT 社会に生きる学生にとって、単なる知識ではなく、

生の感動を与え実体験をする教育、そしてまた機会あるごとに実物に接し、身体を使う教育は、今日特に大切であるを考える。

IV 人間性の回復

1. 知・情・意のバランス

戦後の新しい教育理念に基づき、昭和22年（1947）に学校教育法が制定された。2年後に社会教育法が制定され、法の制定のない家庭教育とともに三大教育が揃った。その後さまざまな問題が教育現場で起っているが、その一つは知育偏重であろう。まず目に見える小・中学生の体力の低下が問題にされ、体育が推奨された時期がある。次いで知育偏重は正のため“ゆとり教育”が提唱され、週休2日制などの方策が取られた。しかし、その成果も出ない内に、2004年には国際社会の中でわが国の学力の低下が問題になった。

また1970年代から1980年代のバブルの時代のもの余り社会は、決して人びとを幸せにしなかった。教育界だけでなく各界で「ものの豊かさから心の豊かさへ」と警鐘が鳴らされた。にもかかわらず、今日その警鐘に込め、心の豊かさを達成したとは考えにくい。使い捨てや飽食、コンビニや自動販売機、ITの普及など、ものの豊かさと便利さが増すにつれ、人びとの心はむしろ貧しくなっているのではなからうか。ものの豊かさとは、数や量の多さではなく質の問題であり、一つ一つの「もの」が大切にされることであると気付くべきであろう。心の豊かさとはよき「もの」との出会い、人と人の心の触れ合いに依って得られると考える。従って、「もの」が大切にされ、人が「ひと」の心に触れる「場」としての博物館は、まさに現代社会の難問を解く鍵を持つと考える。

2. 心と感性を育む

それでは21世紀の現代社会において、知・情・意のバランスが取れる教育とはどのような教育であろうか。心身を持つ人間にとって、そのいずれの維持も重要である。毎日の食事・睡眠は身体維持に欠かせない。では心情の維持に欠かせないものは何か。人の心がそれを失えば生きられないもの——それは信・望・愛ではなからうか。現在、年間約3万人もの人が自らの生命を絶っていると言われる。その理由はこれらを失ったためと考える。さまざまな問題を抱える現代社会で、死に至らないまでも、心を病む人や心が萎えている若者が増えている。人の心情を活性化するのは何か。スポーツやレジャーなどもあろう。しかし、優れた芸術文化から受ける感動、知的好奇心の刺激は、大きな力を持つと考える。

これについては、文化芸術振興基本法（平成13年）に基づき、平成14年12月、閣議決定され

た「文化芸術の振興に関する基本的な方針」に明記されている。文化芸術の振興の必要性として、第一に次の項目が掲げられている。¹⁵⁾

一、人間が人間らしく生きるための糧

文化は、人々に楽しさや感動、精神的な安らぎや生きる喜びをもたらし、人生を豊かにするとともに、豊かな人間性を滋養し、想像力を育むものである。豊かで美しい自然の中で育まれてきた文化は、人間の感性を育てるものである。

博物館における芸術文化との出会いは、人の心と感性を育むものである。

む す び

さて、IT 社会の歪みを是正するものは何か、失われてゆく人間性の回復を図るものは何かを考えて来た。生涯学習施設である「博物館」へ行くことは、自発的・能動的行動である。その積極的行為によって、人は実物を見、現実に触れ、さらにそれらの奥にある不変の真善美に出会うのである。

しばしば、学芸員は「もの」と「ひと」を繋ぐ架け橋と言われる。確かに博物館という「場」には、人びとの心情を動かす「もの・博物館資料」との出会いがあり、「ひと」との出会いがある。この場合の「ひと」とは、学芸員やボランティアの人、他の鑑賞者など現実の人だけに留まらない。博物館資料を通して、人は古今東西の「ひと」と出会うのである。博物館にあって、人は「もの」と「ひと」とよい関係を結ぶ。「博物館へ行く」ことによって新しい出会いをし、そこから新しい世界が広がるのである。

「こうしてわれわれは、美術館に日常出掛けるのは教養・教育のためではなく、実は我々の生活そのものを人間として深め確かめる「出会い」のためであった事に気がつく」¹⁶⁾ のである。確かに博物館は、単なる生涯学習施設、芸術文化の処点というだけでない。それは自分の存在を確かめ、長い歴史と広大な宇宙・自然の中での自分の位置を思考する場なのである。そしてまた、「ひと」と「もの」、 「ひと」と「ひと」が出会う「場」、IT 社会における人間性回復の「場」であると言える。

15) 文化庁発行『文化芸術の振興に関する基本的な方針』平成14年12月10日、1頁。

16) 山本正男著『暮らしの美学』山梨大学教育人間科学部、2003年、58頁。

参 考 文 献

- 西野嘉章著 『二十一世紀博物館—博物資源立国へ地平を拓く』 東京大学出版会，2000年
西野嘉章著 『大学博物館—理念と実践と将来と』 東京大学出版会，1996年
西野嘉章著 『博物館学—フランスの文化と戦略』 東京大学出版会，1995年
全国大学博物館学講座協議会西日本部会編 『概説博物館学』 芙蓉書房出版，2002年
椎名仙卓著 『明治博物館事始め』 思文閣出版，1989年
上野益三 『博物学の時代』 八坂書房，1990年

博物館実習風景

1. 学内実習



工芸品・茶道具の取扱い実習



抽装の取扱い実習



「広島的女性画家展」展示実習（旧図書館ギャラリー）

2. 学外の館務実習



野外彫刻の清掃の実習（周南市美術博物館）

夏休み中の子どもを対象にした
教育普及活動の実習（江波山気象館）